

## 外部専門家活用としての介入する授業実践研究 —夢×人×地域「社会とつながる特別支援学校」推進事業を活用して—

日高 まり子

### 1. はじめに

この事業は、宮崎県教育委員会特別教育支援課『夢×人×地域「社会とつながる特別支援学校」推進事業』としてとして「外部専門家の活用実践研究」として宮崎県立児湯るびなす支援学校で実施されたものである。この事業は、外部専門家と現場の教員が授業実践研究を通して指導・支援についての研究を行うことで教員の指導力を高め、大学等の専門機関との連携を図り、教育の質の向上を目指すものである。筆者は、宮崎県立児湯るびなす支援学校（以下研究校）から外部専門家として委託を受けて、当校の研究の取り組みとして「重度肢体不自由児童生徒における音楽療法の在り方」をテーマとして授業実践研究を実施したものである。

### 2. 研究概要

#### (1) 研究計画

研究計画については、事業内容の共通理解の後、各対応学部の課題や研究授業の在り方なども含め以下の内容を協議した。

- 事業内容についての説明
- 研究グループ確認と事業内容の共通理解
- 研究内容および研究日程計画についての協議
- 理論研修・・・授業づくりの要素、自立活動と音楽活動の関係性、授業分析の視点
- 児童生徒の実態把握及び授業参観
- 出前授業による授業研究、事後研究および研究協議
- 実践授業研究、研究協議
- 研究のまとめ

#### (2) 事業内容

##### ① 研究内容

重度肢体不自由児児童生徒における音楽療法の在り方について研究する。

##### ② 研究グループ

研究校職員：重複障害児学級担当、小学部職員4名、中学部職員5名、高等部職員8名、訪問教育学級職員7名、教頭

研究校の重度肢体不自由児童生徒は、重複障害児学級および訪問教育学級に在籍しており、それらの児童生徒を対象とした学級等の職員が研究グループとして参加した。研究においては、学部ごとにグループを作り、出前授業、実践授業研究を実施した。

##### ③ 研究内容および研究日程計画についての協議

障害の特性から、受け身での授業形態になりがちである授業において、学級の児童生徒同士のつながりをもたせた児童生徒が生き生きとした姿の見える音楽活動の創意工夫についての授業研究、およ

び、指導の展開内容において重度肢体不自由児童生徒に対して音楽療法のねらいや視点を取り入れて効果的な授業実践の研究に取り組むことを研究内容として確認した。

研究内容として「重度肢体不自由児童生徒を対象に音楽療法の専門の先生と本校職員が連携して実践授業を行うことにより、児童生徒のコミュニケーションを広げるとともに、感性を豊かにし、表現力の育成につなげる。」と設定した。

研究校職員より日頃の授業の様子や児童生徒の障害の実態についての小学部、中学部、高等部、訪問教育学級各グループ説明を受け、児童生徒の実態とともに、授業改善のための研究に対する期待も含め、研究の取り組みについて協議し、研究計画を立案した。第1回では、各グループの授業参観と児童生徒の実態把握、第3回、第4回に実施する出前授業での授業研究をふまえて、各グループで第5回、第6回の研究授業を実施し、第7回の出前授業において研究内容にそった授業提案をしていくことを計画した。研究のまとめは、研究校が実施報告書としてまとめることを確認した。

#### 【研究計画】

第1回（2019年8月7日）研究内容・計画・各学部の課題説明

第2回（2019年9月6日）児童生徒の実態把握：小学部・中学部・高等部・訪問教育学級

第3回（2019年9月19日）出前授業、授業研究：小学部・中学部・高等部

第4回（2019年9月26日）出前授業、授業研究：訪問教育学級

第5回（2019年11月7日）授業研究、授業研究：訪問教育学級

第6回（2019年11月14日）出前授業、授業研究：小学部・中学部・高等部

第7回（2019年12月12日）実践授業、研究のまとめ ※研究報告書の提出

#### (3) 理論研究

自立活動での音楽的な活動をベースとした授業展開において、音楽療法的アプローチを活用する効果について理論面からの理解を深めるために、「授業づくりの組み立ての要素（表1）」や「自立活動の区分と項目別の音楽的な活動の指導内（表2）」、「音楽の特性」について理論研修を授業研究内容と合わせて行った。

##### 1) 授業を組み立てる

よりよい授業を組み立てるためには、教師の自己評価につなげる指標が必要である。その指標の要素をInspiration、Feeling、Imagination、Creation、Storyteller、Interactionの6つの要素の観点から評価基準を設定することで、学習内容、学習活動を振り返り、自己評価をグループ内評価に繋げ、客観的な評価の視点とし活用することができる。この授業を組み立てる要素は、筆者が本学の研究紀要（「教育科学論集」2017.第4号）に「学校における音楽の授業づくり～教師の自己フィードバック Teaching Essence（授業組立の要素）の視点から」に研究として示したものである。

##### 2) 自立活動の区分と項目別の音楽的な活動の指導内容

重度肢体不自由児童生徒の所属する教育課程は、児童生徒の実態を考慮し自立活動を中心としたものになっている。小学部年間授業時間850時間中408時間（48%）、中学部年間授業時間1050時間の内420時間（40%）、高等部年間総授業時間数1050時間中385時間（37%）が自立活動の指導時間となっている。自立活動は、「障害がある児童及び生徒が自立を目指して、障害に基づく種々の困難を主体的に改善・克服するために必要な知識、技能、態度及び習慣を養い、もって心身の調和的発達の基盤を培う」として設定されている教育的な活動を行う指導領域である。音楽的な活動はその自立活動

要素	観 点
<p>Inspiration</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○子どもに気づく</li> <li>○教材に気づく</li> <li>○自分に気づく</li> </ul>	<p><b>Inspiration</b> をベースにして始まる指導</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○実態、状況の洞察力</li> </ul> <p>子どもの音楽への興味関心や音楽的な実態を把握するためには、音、音楽に対する反応を観察し、その反応を洞察することが大切である。その気づきが授業の目標設定につながっていく。また、提供する授業の素材、教材選択が適正であるかを気づくことが授業づくりの基本となる。</p> <p>授業する環境や学習グループの実態についての気づきも授業づくりの要素として大切である。集団における個々の関係性や繋がりなど学習活動をアクティブに展開させる要素として気づくことでグループ作りなどに効果的な配慮ができる。</p> <p>授業の場は空間の大きさや音の響き方、視覚的な刺激（掲示物や教室内にある目につくもの）で音や音楽の気づきを大きく左右する。教師はその学習環境への気づきが大切である。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○教材に気づく</li> </ul> <p>目標を設定し、授業の題材を具体的展開にするための教材（楽曲、楽器、素材等）のもつ音楽的な効果に気づくことが大切である。子どものテンポ感や拍子感、リズム感、調性、旋律への感性、発声発音のための呼吸や身体意識、楽器演奏のための運動機能、歌詞や旋律等の理解のための認知力、などの気づきは、授業展開においてねらいを達成させるために必要となる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ねらいを具体化させるひらめき</li> </ul> <p>様々な音楽活動をどのように選択していくかを決定する気づきは、瞬間的であり計画的である。指導のねらいを授業で具体的に展開するために音、音楽へのひらめきは重要である。そして指導のねらいの到達に向けて学習計画を描くことができるのである。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○自分でできることを見極める直感力</li> </ul> <p>提供する音楽を展開する教師の指導力により洞察された総合的な気づきを授業に生かしてことが大切である。実際の授業の展開においては、子どもの反応に瞬時にして気づき指導の展開の工夫に気づける指導力が求められる。</p>
<p>Feeling</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○子どもを感じる</li> <li>○教材を感じる</li> <li>○自分を感じる</li> </ul>	<p><b>Inspiration</b> から <b>Feeling</b> につなぐ指導</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○呼吸感、空気感、存在感</li> </ul> <p>授業に参加している子どもの状態は呼吸から感じるができる。興奮している子ども不安感の高い子どもの呼吸は早く、配慮が必要であることを感じる事ができれば指導の展開の工夫につなげることができる。なぜそうであるのかという原因を考察しながら感じていくことが指導をより適切にすることができる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○繋がる素材・教材</li> </ul> <p>子どもの様子を感じることは準備した教材、音の素材を感じ共感することにつながる。その教材、素材を使った音楽活動が子どもとつながる素材・教材となっていることを感じる事が大切である。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○自分を見つめることのできる分析力</li> </ul> <p>子どもを感じている指導者自身の気づきは、指導内容についての考察へとつながる。音の素材や教材の工夫の必要性も感じられることが必要である。即興的なアレンジ力が求められる場面も多い。</p>
<p>Imagination</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○授業を想像する</li> <li>○子どもの内面を想像する</li> <li>○繋がりを想像する</li> <li>○教材の展開の拡がりの創造</li> <li>○即興的に今を想像する</li> <li>○自分の思いを想像する</li> </ul>	<p><b>Feeling</b> から <b>Imagination</b> に展開する指導</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○子どもの姿、自分の姿が見えるか。</li> </ul> <p>授業をイメージする力をもつことは重要である。準備した授業内容がどのように展開されるかをイメージできるかは、授業の成立に大きくかわる授業力である。子どもがどのように活動するであろうか、どのように反応するであろうか、どのように理解を深めることができるであろうか等、子どもがイメージできことで教師の姿もイメージできる。その場面はいくつものパターンがイメージされることが大切であり、そのいくつかのイメージで授業の準備や工夫が決まる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○今、ここで起きていることが見えているか。</li> </ul> <p>準備された授業ではあるが、実際の授業場面では様々な展開が見られ</p>

		<p>る。即時的な反応は必要であるが、変化する実際の場面においてイメージ化して展開の工夫を子どもに合わせながら授業のねらいから逸れないようにいくことが必要である。学習場面の生徒の姿をイメージしていく。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○言語化できる空間と非言語的な空間の共有</li> <li>音や音楽は言語化できる場面ばかりではなく、イメージを共有する場面が多くある。音や音楽から感じる様々なイメージは授業展開を具体的にイメージできることが大切である。</li> <li>○様々な場面をアレンジできる応用力</li> <li>イメージされた音楽活動は発展的な学習活動への創意工夫へとつなげることができる。</li> </ul>
<p>Creation</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○授業を創造する</li> <li>○授業をストーリー化する</li> <li>○授業を色づける教材</li> <li>○授業を描く</li> <li>○子どもとともに創造する時間を描く</li> </ul>	<p><b>Imagination からより Creation に発展する指導</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○音を創造する</li> <li>想像された音や音楽を構造化していくことで創作へと発展させることができる。</li> <li>○子どもと共につくる即興的な音、音楽</li> <li>子どもの作り出す即興的な音や音楽の世界を共感・共有し創造していく音楽づくりの過程が大切である。</li> <li>○作られた音、音楽を意味づける。</li> <li>想像された音や音楽を、音楽作品として創造していく活動を大切にしていける。音楽的内容の知覚をさせながら、基礎的理解を深め、音楽の作品の主眼的な意味づけする場面を創造できることが必要である。</li> <li>○時間、テンポ感、リズム感、ハーモニー、距離感、空間把握の創造、音楽を構成する要素を理解し、音楽技能の習得を図らせ、発展的な学習への興味関心を高めていく場面を創造していくことができる。</li> <li>○色彩化され映像化される授業</li> <li>イメージされ創造される過程で、音や音楽を美術的感性での想像的な活動を展開する。音絵や即興的な描画など視覚化させる創造的活動など発展的な活動へとつなげていく。</li> <li>○今ここに見える子どもの表現を高めることのできる創造</li> <li>子どもの想像する音や音楽の世界を指導者が工夫し想像することで豊かな情操を養っていく。</li> </ul>
<p>Storyteller</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○授業を語り手としての指導者</li> <li>○授業を構成し、演出する</li> <li>○子どもの内なる物語を語る</li> <li>○子どもと繋がる物語の創造</li> </ul>	<p><b>Creation を Story につなげていく指導</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○創造した授業を演じる</li> <li>授業の流れを物語として創造し組み立て、教師は語り手として授業づくりをする。</li> <li>○子どもが主役となる授業のシナリオを描き続ける。</li> <li>音・音楽を素材にした授業展開をシナリオとして創造し、語り手である教師は役者としての子どもたちの個々のオリジナリティを大切に役づくりをしながら子ども一人一人を引き立てていく。</li> <li>○子どもとつながった瞬間を感じる。</li> <li>語り手である教師は、役者である子どもたちの心情を共有し、一体化して工夫された音・の世界が広がる音楽物語である授業を通して、感性を高めていくことができる。様々な音や音楽の響きを感じてイメージし創造しながらつながりあう瞬間、瞬間の時間を大切にしていける。</li> <li>○広がる響きの小さな感動を語り合えるつながりあい。</li> <li>教室いっぱい音、音楽が響き、創造的な作品づくりへの学習の感動を共有する。</li> </ul>
<p>Interaction</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○子どもが他者を感じる</li> <li>○授業の中の相互関係</li> <li>○TeamTeaching</li> <li>○子どもの発達を願う思い</li> </ul>	<p><b>Interaction を活用する指導</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○相互的な関係</li> <li>子どもは授業の展開の活動の中で、教師や友だち他者を感じ、さらに相互的な関係性を見出すことができる。同じ空間で創り出す協働的活動の体験、作品作りの過程の体験的活動の中での自己実現、作品完成の感動の共有など相互的な関係の中からの体験が重要である。個の表現活動を個の表現活動を集団の表現活動として発展的に展開することで社会的な秩序の学びへとつなげることができる。</li> <li>○教師同士の相互作用で成立する授業の展開を創り出す。</li> <li>教師がチームで子どもを指導できるための体制づくりの重要性。複</li> </ul>

		<p>数の指導者による指導体制は、子どもの実態の共通理解や指導目標の確認などを踏まえた上で、効果的な指導にすることができる。単一教科のみの指導ではなく他教科（美術、体育、国語、理科、社会、等々）、領域との連携を図ることでよりダイナミクスな題材の展開につなげることができる。ティームティーチングとしての効果的活動を創造していくことでより学習効果を高めることが期待できる。</p> <p>○自己の確立をねらい、社会性への気づきを高める。</p> <p>音、音楽を媒介とした活動は、他者への気づきが生まれその気づきは二項関係から三項関係へと発展的活動となり、社会性広げていく。自己表現力を高め、他者に認められる体験を通して、自己肯定感や自己実現力を向上させていくことができる。</p>
--	--	---

表1 教師の自己フィードバック Teaching Essence（授業組立の要素）

の時間を中心に実施されているが、自立活動のねらいは音楽療法としてのねらいと重なる部分も多くあり、関連した活動とすることができる。自立活動の指導内容の区分・項目の「健康の保持」「心理的な安定」「人間関係の形成」「環境の把握」「身体の動き」「コミュニケーション」と音楽的活動内容（歌唱、器楽、身体表現、鑑賞）との関連性を示し（表2）、自立活動の指導内容を配慮した指導計画を立案し、授業研究の検討に活用した。

区分・項目		音楽的活動による指導内容			
		歌唱活動	器楽活動	身体表現	鑑賞活動
健康の保持	①生活のリズムや生活習慣の形成	<ul style="list-style-type: none"> <li>発声のコントロール</li> <li>呼吸のコントロール</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>打楽器演奏の基本的動作</li> <li>演奏技能の獲得</li> <li>演奏技能の向上</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>身体各位への感覚刺激</li> <li>身体の各部位の動きの理解</li> <li>身体運動による全身活動</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>音を感じる</li> <li>音への関心</li> </ul>
	②病気の状態の理解と生活管理				
	③身体各部の状態の理解と養護				
	④健康状態の維持・改善				
心理的な安定	①情緒の安定	<ul style="list-style-type: none"> <li>声量のコントロール</li> <li>発声の気づき</li> <li>歌唱への興味関心</li> <li>安定した発声(歌唱)</li> <li>合わせて歌う</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>演奏音量のコントロール</li> <li>楽器と自己の二者関係の気づき</li> <li>楽器演奏への興味関心</li> <li>演奏技能の向上</li> <li>器楽演奏への参加</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>音楽に合わせた身体の動きのコントロール</li> <li>速さ、強弱、曲想に合わせた動き</li> <li>物語を想像に合わせた動き</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>音楽を感じて参加する</li> <li>いろいろな音楽を感じる</li> <li>好きな音や音楽を感じる</li> <li>好きな曲想を感じる</li> <li>音楽の理解</li> </ul>
	②状況の理解と変化への対応				
	③障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服する意欲				
	④集団参加への基礎				
人間関係の形成	①他者とのかかわりの基礎	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分や他者の歌声への気づき</li> <li>歌唱の表現への気づき</li> <li>歌声のコントロール</li> <li>歌唱活動への参加</li> <li>合わせて歌う</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分の鳴らす楽器の音への気づき</li> <li>他者の鳴らす楽器の音への気づき</li> <li>手指をコントロールさせた演奏</li> <li>音量、音色のコントロール</li> <li>他者と合わせる活動</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>簡単な身体の動きで一緒に表現活動をする</li> <li>自分の動きのコントロール</li> <li>他者の動きを感じる</li> <li>合わせて動く活動への参加</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>集団を感じる</li> <li>一緒に鑑賞する</li> <li>心地よさを感じる</li> <li>面白さや楽しさを一緒に感じ共有する。</li> <li>安心感の中での鑑賞</li> </ul>
	②他者の意図や感情の理解				
	③自己の理解と行動の調整				
	④集団参加への基礎				
環境の把握	①保有する感覚の活用	<ul style="list-style-type: none"> <li>自発的発声、発音</li> <li>発声のコントロール</li> <li>教具を使った歌詞(言語)の理解…歌詞カード等</li> <li>視覚、聴覚、運動の感覚の統合</li> <li>旋律を覚えて歌う</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>楽器での感情の即興的表現</li> <li>触覚、視覚、聴覚、運動との各感覚の統合</li> <li>旋律を理解して楽器を演奏する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>音楽に合わせた身体活動</li> <li>布などの教材を使った身体活動</li> <li>止まる、動く、待つ、強い、弱い、速い、遅い、ゆっくり、だんだん(強い、弱い、速い、遅い、)</li> <li>触覚、視覚、聴覚、運動などの各感覚の統合</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>音の響く空間への気づき</li> <li>聴くことへの気づき</li> <li>聴き分ける</li> <li>みんなと一緒に鑑賞する</li> <li>視覚、聴覚感覚の統合</li> </ul>
	②感覚や認知の特性への対応				
	③感覚の補助及び代行手段の活用				
	④感覚を総合的に活用した周囲の状況の把握				
	⑤認知や行動の手掛かりとなる概念の形成				

身体 の 動 き	①姿勢と運動・動作の補助的手段の活用 ②姿勢保持と運動・動作の補助的手段の活用 ③日常生活に必要な基本動作 ④身体の移動能力 ⑤作業に必要な動作と円滑の遂行	・歌唱の姿勢保持 ・発声の技能 ・発声、歌唱の呼吸コントロール	・楽器の演奏技能(手指の動き、演奏姿勢の保持)	・身体の動きの柔軟性 ・音楽に合わせた身体の動き ・顔の表情のコントロール ・他者を感じながら、一緒に動く	・音、音楽を聴いて身体を自由に即興的に動かす。 ・旋律やリズムに合わせて身体を動かす。 ・動きの模倣
コ ミ ュ ニ ケ ー シ ョ	①コミュニケーションの基礎的能力 ②言語の受容と表出 ③言語の形成と活用 ④コミュニケーション手段の選択と活用 ⑤状況に応じたコミュニケーション	・他者や自分の歌声の気づき ・自分の歌声(声)を他者へ聴こえるように伝える ・自分の声と他者の声を合わせ一緒に歌う ・歌詞の表現	・演奏にみんなと一緒に参加する ・他者の演奏を聴き、合わせる。 ・曲想を感じて演奏する。 ・指示を聞いて演奏する。	・他者を感じてみんなと一緒に動く	・みんなと一緒に鑑賞する ・円滑な仲間との関係性作り

表 2 自立活動の区分・項目と音楽的活動との関連性

### 3) 音楽の特性を活かす指導

本研究において音楽療法的なアプローチを授業に取り入れる視点として、音楽の様々な特性を活用することで児童生徒への教育的効果を高めようとするものである。その理論面での研修として、松井紀和氏や宇佐川浩氏の資料をもとに音楽の機能や発達の効用についてまとめた。

日本臨床心理研究所所長の松井紀和氏は「音楽療法の手引き」で音楽の機能を「①音楽が知的過程を通らずに、直接情動に働きかける。②音楽活動は、自己愛的満足をもたらしやすい。③音楽は、人間の美的感覚を満足させる。④音楽は、人間の発散的であり、情動の直接的発散をもたらす方法を提供する。⑤音楽は、身体的活動を誘発する。⑥音楽は、Communication である。⑦音楽は一定の法則上の上に構造化されている。⑧音楽は多様性があり、適応範囲が広い。⑨音楽活動には総合的機能が必要である。⑩集団音楽では、社会性が要求される。」と述べている。

また、宇佐川浩氏は、「音楽療法におけるは発達診断」において、音楽の発達の効用について、「①音楽は初期的段階の子どもにとって授業しやすい。②音楽は情動に働きかけやすい。③音楽は構造を有するが故に、向かい合う姿勢をつくりやすい。④音楽は繰り返しパターンがあるが故に、予測しやすく分かりやすい。⑤音楽は、動的にも静的にも活用でき、情緒の安定に役立つ。⑥楽器類は初期的な手先操作で音出しが可能である。やがて目と手の供応に関与する。⑦三項関係を、歌や楽器を媒介としてつくりやすい。⑧集団での音楽は、ひとりひとりに役割を与えやすく、社会性の発達に貢献する。⑨音楽は合わせることによって、自己調整力を高め、自我を発達させる。⑩音楽は聴覚運動、視覚運動の供応性を増し、認識する力や言語の発達を促す。」と述べている。

### (4) 出前授業での授業研究

#### 1) 学習目標設定

- 見たり、聴いたり、触ったり、動いたりする活動を通して、音・音楽に気づく。
- 表現や鑑賞の活動を通して、いろいろな旋律やリズムの楽しさを味わう。
- 表現活動を通して、自己表現能力を高め、コミュニケーションの拡大を図る。
- 学習活動を通して、心身の発達や情緒の安定を図る

## 2) 音楽療法的な視点での指導

- 音・音楽に気づく活動
- 身体刺激・感覚を感じる活動
- 楽曲を楽しむ力、認知としての活動
- 仲間とともに楽しむ活動
- 音楽を自分から楽しむ活動・余暇活動

## 3) 活動内容

- 遊び歌をはじめ様々な楽曲を通した音楽活動（表現・鑑賞）、身体刺激や身体表現活動、即興的な楽器演奏を通して自己表現から仲間と音で繋がる活動を体験する。
- 打楽器等の楽器を通した音の響きに触れたり、歌唱活動などで発声したり、身体活動での動きから、様々な感覚への刺激を感じる。
- 楽器の響きや音の動き、リズムや旋律を感じて動く身体表現活動、グループの動きの中での音を通したコミュニケーションなどの表現活動に取り組み、歌などの音楽をストーリー性のある活動で広げる音楽づくりにつなげ学習をする。
- 音楽を感じて心身を活性化したり、リラックスしたりする活動に取り組む。
- 視覚的な教材を使って音・音楽と関連させながら感じ取り、想像的な活動を楽しむ。

## 4) 授業研究

### ①出前授業

出前授業は、小・中・高等部において令和元年9月19日、12月12日、訪問教育学級では9月26日、11月7日に2回ずつ実施した。1回目は提案授業として、2回目は研究授業を受けての模範授業とした。

#### 《小学部》

第1回目は「音を感じて楽しもう」として、導入曲「みんなうたう」でフィンガーシンバル、クラスターチャイムの響きを感じて音・音楽への意識を高めことから始めた。「風のおはなし」の始まりの歌から感覚刺激のあそびうた「テンポコチレチレ」「つんつんつんとんとん」「できたらイエーイ」「ウルトラフィンガー」に取り組んだ。展開では音楽絵本「シーらんぺったん」の発展的活動を行った。終結ではツリーチャイムと「きみとぼくのこころ」の音楽をあわせ、音を感じながらリラックスできる終結の活動を実施した。児童のかすかな反応を音でどのようにつないでいけるかを検証した。感覚刺激を感覚統合として発達につなげていけるねらいを研究する機会とできた。第2回目は「季節の音や音楽を感じて楽しもう。」という題材を設定し、以下の学習活動を展開した。（表3）

#### 《中学部》

題材としては第1回目「いろいろな旋律を楽しもう」、第2回目「季節を感じていろいろな旋律を楽しもう」として展開した。中学部では「にじいろ」「シャカシャカブギ」で授業を始めた。また、展開では「あさき夢みし」の導入から「ぴっとんへべへべ」「ややこしや」「おっと合点承知之介音頭」の日本の旋律や言葉を取り入れた楽曲を教材とし、様々な楽器を取り扱った。音楽文化への生徒の興味関心を高められ、さらに主体的な生徒の活動を引き出す楽曲や楽器の選択の仕方について楽器の表現活動についての研究を深めることができた。また、ICTなどの情報機器の活用についても検討し、機材を体験した。

### 《高等部》

「音・音楽を合わせて一緒に楽しもう」「リズムや旋律の特徴を感じて一緒に楽しもう」の題材で「What's your name?」での個別の簡単な英語詞の歌唱活動から「海の声」「RPG」「星野源 ドラえもん」「ダイナミック琉球」「愛にできることはあるかい」「上を向いて歩こう」「I'm still standing」「Sing!!!!!!」「あなたに」「Happy X'mas(War is over)」等の楽曲を取り扱った。J-pop や話題の楽曲など高校生という生活年齢と発達年齢との関係性を配慮した楽曲選択や歌唱活動、器楽活動の展開について提案した。手作り楽器や民族楽器などを使って様々な打楽器奏法のアイデアによって、生徒の音楽への積極的な参加の様子が見られ、音楽の可能性を検証することができた。音楽の刺激的な特性と鎮静的な特性での情緒の安定や仲間との楽しい活動において新たな生徒同士のコミュニケーションの場面なども見られた。高等部の障害学級が合同でグループを組むのは今回が初めての試みであったため、先生方にとって新たなグループ編成のよさを感じることもできたようだ。今後、生徒の実態を生かした授業形態を検討していくことも必要である。

### 《訪問教育学級》

訪問教育学級では合同授業とベッドサイドでの個別授業を実施した。合同授業では、「音・音楽を合わせて一緒に楽しもう」個別授業では「音・音楽を感じながらお話を楽しもう」の題材で実施した。「心のノート」、「なにやってもあかんわ」などの楽曲で歌詞のリズムや響きを楽しんだり、音楽絵本「なんでやねん」・「なんだこりゃたまご」での言葉遊びとしての活動、「上を向いてあるこう」「風になる」などでは、楽器を演奏する楽しさを味わったりした。終結では「ただ君として」「祈り」などメッセージ性のある楽曲を使用した。療育施設的环境下にある訪問教育学級において、合同で音楽活動をする場面は少ないが、今回の合同授業を実施し、集団における自己の存在を感じる機会とすることができた。鑑賞する中で過年度生の生徒が支援にあたる職員と自己の過去の生活などを回想する場面を見られ自己肯定感を高めていた。意欲的な音楽活動への参加により、身体機能の維持改善や生活の質を向上することにつながる効果も期待される。余暇活動としての関心や意識を高められる教材選択とその展開のアイデアを提示し、生活年齢を尊重する指導の在り方についても協議し研究を深めた。

出前授業の事後研究では、各学部の授業内容について協議された。小学部では、指導者の児童への効果的な声掛けやそのタイミング、児童の歌唱や楽器演奏での正しいポジショニング方法、児童への必要な関わり方を見極め、効果的な身体刺激のスキル、児童の反応の捉え方と指導のねらいとの関係についてあげられた。中学部では、授業の流れの工夫、生徒の自発的な動きを導き出す活動や教材の工夫、教材研究の方法、生徒の自発的な動きを導く効果的なアプローチ方法、生徒の発達年齢やと生活年齢を考慮した教材曲や楽器など教材選択の方法などについて、生徒の実態からどのようなねらいを設定して指導計画や教材準備について協議された。高等部では、音楽を使った授業の雰囲気作り方、生徒の他者意識の出現を引き出すアプローチの在り方、身体活動の自発的な動きの誘発と活性化の方法、余暇として楽しめる音楽の活用、教材曲の選曲の仕方などが協議された、さらに新しいグルーピングで実施した出前授業の効果から新たな授業形態についても検討された。訪問教育学級においては、過年度生など生徒の実態が年齢も含め差異が大きく、音楽の感じ方、日頃との表情の相違出前授業にける変容とベッドサイドでの個別指導における教材選択とその展開方法、活性的な活動内容、余暇としての音楽の提供の在り方などが協議された。



	学習内容及び学習活動	指導上の留意点・支援	備考・準備
導入	① 音を感じる 「星に願いを（オルゴール Ver.）」 フィンガーシンバル、クラスタチャイムの響きや楽器の感触を感じる。	・「星に願いを（オルゴール Ver.）」を集合に合せて流し、音楽のある空間を提供し授業の始まりへの意識付けをさせるようにする。 ・音、音楽に気づけるように楽器の位置や声かけを配慮する。	CD フィンガーシンバル クラスタチャイム
展開	② ドラムあいさつ ハンドドラムを打つ響きを感じて双方向の挨拶をする。 3打のリズムと言葉のリズムを感じる。	・児童の表情、様子を観察し、支援者に個別の配慮について確認する。 ・個別のテンポで言葉に合わせたリズムが主体的に打てたり響きを感じられたりするように打面の位置や動きのサポートや声かけを配慮する。	ハンドドラム
	③ 本時の学習内容を知らせる。	・活動の始まりを意識できるよう、音楽の提示の工夫や支援者との連携を図る。	CD 歌詞カード オーガンジー布
	④ 始まりのうたを歌う。 「こころがおどる」	・T1が歌詞「ダンス」、「ジャンプ」にあわせた身体表現をしながら旋律を示し、楽曲の雰囲気を感じられるようにする。	CD 歌詞カード リコーダー スティック フレクトリック ドラム
	⑤ リズム表現を楽しむ。 「ほしのごキララ」を聴く。 ・スティックでリズムを表現する。 ・フレクトリックドラムの音を楽しむ。	・リズムに合わせながら発音したりや楽器演奏しながら、楽曲の雰囲気を感じられるようにする。 ・繰り返される歌詞「ビビビビビパビブペボ」、「ビビビビビパビブペボ」の楽しさを身体にタッチされる感覚刺激などを通して感じ取らせるように旋律を示す。 ・スティックや楽器演奏など身体への刺激活動を通して、身体感覚への気づきを促せるよう支援する。支援者は児童の実態に合わせて刺激の程度を調整する。 ・刺激の変化を感じられるよう支援を工夫する。 ・フレクトリックドラムの奏法を知り、児童の実態に合わせて支援を工夫する。	CD 歌詞カード 各楽器 歌詞カード
	⑥ 「季節の音・SEASON NOTE」を聴く。	・他者への気づきを促せるよう、友だちへの声かけなどの支援をする。	CD CD 各楽器 歌詞カード
終結	⑦ 「クリスマスうたがきこえてくるよ」の音楽を楽しむ。 ○旋律を聴く。 ○楽器を選択して演奏する。 ・交互に演奏する。 ・友だちの演奏を批評する。	・テンポの違いを感じ取らせ、次の活動への展開を知らせる。 ・楽器を演奏する楽器やパートを児童の意思を確認しながら決定し、演奏への関心を高めるように配慮する。 ・楽器の鳴らし方を示し、児童の主体的な演奏への意欲に寄り添えるよう児童の実態に合わせた支援を工夫する。 ・友だちの演奏を聴きながら、児童の実態に合わせて感じたことを表現できるように支援する。	CD 楽器
	⑧ おわりの音楽を聴く。 「しずかなクリスマス」 ○楽器の音を聴きながら活動を振り返る。 ドラムあいさつ	・「しずかなクリスマス」の音楽を聴きながら、支援者とともに表現活動で楽しかったことや印象に残ったことを問いかけたり、児童の表情、様子を観察したりしながら振り返る。	ハンドドラム
	⑨ おわりのあいさつ	・個別のテンポで言葉に合わせたリズムが主体的に打てたり響きを感じられたりするように打面の位置や動きのサポートや声かけを配慮し、終わりを意識させる。 ・挨拶の当番を指名して挨拶をし、授業の終わりを理解する。	

表3 小学部 出前授業 指導の展開例（学習指導案抜粋）

#### 4) 実践授業（検証授業）

筆者の授業提案を受けて、各学部において、授業が実践された。授業研究においてその視点を検証するガイドとして示した。

##### 《小学部》

「いろいろな音や楽器に触れて楽しもう」という題材で、授業の目標は、「①歌唱や楽器の活動を通

項目	具 体 的 視 点
音・音楽	音、音楽への興味関心をもつことができるか。 安心、安定、予測可能、定着を感じることができるか。 音楽的繰り返しを感じられる選曲できるか。
歌唱	声を出したいと思う環境であるか。 好きな楽曲の選択がなされているか。 歌詞からの情報をイメージ化することができるか。 個々の感情やリズムの捉え方の把握できるか。
楽器	楽器への期待感・昂揚感を高めることができるか。 感覚刺激のある楽器の活用することができるか。 実態に合わせた楽器が選択されているか。 個々の感情やリズムを捉えた活動を促すことができるか。 個々の感情やリズムの捉え方の把握できるか。
身体	主体的な活動を誘発できるか。 音と動きによる身体刺激、身体表現の拡がりができるか。 器楽演奏操作による手指の操作性があるか。
鑑賞	聴き分ける音楽の選曲ができているか。 嗜好性と新たな音の正解を提供することができるか。 次の活動への期待感がもてるか。
情緒	快・不快の表出ができるか。 喜怒哀楽の感情がひょうしゅつできるか。 音楽の雰囲気から自分なりのイメージをすることができるか。 模倣や演奏、活動により情動を発散できるか。 楽器の音色、曲調による、情緒の安定することができるか。
コミュニケーション	他者と同期性のイメージ展開を拡げることができるか。 支援者の言葉かけへの反応がみられるか。 模倣や活動でのやり取りを拡げることができるか。 子ども同士、教師と子供の関係性を構築することができるか。 模倣や仲間と一緒に演奏し、他者について感じたり、考えたり、合わせることができるか。 音楽を活動する空間の提示とその場の保障をすることができるか。 模倣や演奏、ことばのやりとりからの他者意識、他者理解への発展することができるか。

表 4 授業研究の具体的視点

して、いろいろなリズムや曲調を感じることができる。②表現の活動を通して、いろいろな刺激を感じたりリラックスしたりすることができる。③楽器演奏や鑑賞の活動を一緒に楽しむ。とができるいろいろな音や楽器に触れて楽しもう」とした。授業の展開として音を感じる活動から音楽で雰囲気を作りながら始まり、感覚刺激を面から線、点へと身体感覚へとゆるやかにアプローチすることができた。刺激過敏への配慮も丁寧に指導することができていた。楽器ではロリポップドラムを活用した。「大きい太鼓」では大きさの感覚を音からの刺激、視覚・触覚から概念認識へとつなげていた。また、主体的な動きを引き出すアイデアもなされていた。実態把握から設定された個別のねらいへの支援がサブティチャーと共有理解して指導にあたることができていた。他者の音を感じて視線をむけたり、表情で表していたりする場面において教師がそれをつなぐ支援をしていたことにより、共にあることを意識しているようだった。

《中学部》

「歌のリズムに合わせて体を動かそう」という題材で、授業の目標は、「①いろいろな旋律を聴いたりリズムを感じて、主体的に歌唱表現や器楽表現をすることができる②友達を意識しながら、身体で

表現する活動を一緒に楽しむことができる。」とした。狭い空間で実施された授業の展開としては視聴覚機材を適宜活用され、生徒の興味関心を高めていた。「パプリカ」の映像に反応して身体を動かしている様子も見られ、主体的な動きを誘発することができていた。オーシャンドラムやタンバリンを楽曲雰囲気に合わせて、意思を尊重しながら楽器を選択させていた。楽器の嗜好性から活動への意欲が高まっていた。楽器演奏では、個別のパートを設定することで、自己の役割で自己実現の場面と集団帰属感を意識できている場面設定がなされていた。発声に困難さのある生徒達であったが、好きな楽器が提供されると思わず声を出す場面があり、周囲の称賛の声に良い表情を見せていた。自己評価を高めることができた瞬間をみんなで共有することで他者につながる活動とすることができていた。障害から緊張の強い生徒もおり、生徒の状態をサブティチャーと連携して把握し、適宜にリラックスできる空間の保証がなされていた授業のねらいや流れの中で、生徒の実態把握が共有されていた。

### 《高等部》

「音・音楽を合わせて一緒に楽しもう」という題材で、授業の目標は、「①表現や鑑賞の活動をとおして、いろいろな旋律やリズムの楽しさを味わう。②身体表現や歌唱、器楽の活動、光遊びを楽しむ。③自己決定して表現する活動を楽しむ。④友だちと一緒に楽器を楽しむ。」とした。出前授業で提案した「What's your name?」の英語詞歌唱活動を定着させて、生徒が言葉や友達との呼びかけの活動を積極的に楽しむ姿が見られた。自己表現や他者理解へとつながっていた。「ダイナミック琉球」では身体表現と歌唱活動を組み合わせて取り組み、ダイナミクスな活動となっていた。集団としての活動を動きの少ない生徒へのその雰囲気伝える支援もあった。絵カード楽譜を提示しての楽器演奏では個々の役割を設定して演奏活動に取り組んだ。楽器の音のイメージを生徒それぞれの言葉や雰囲気表現させ、女子表現の意欲を高めていた。教室全体の照明を落としてペンライトでの光刺激のスヌーズレンのような雰囲気のある空間を設定した中で、リラクゼーションする場面もあり、生徒達に空間認知としての刺激とすることができていた。終結では「あの空」の歌唱活動でみんなと一緒に個々にいるという自己確認と他者意識から集団理解へと繋げることができていた。教師の指示において、言語での説明が多くなる傾向が感じられた。音・音楽を通した体験を通した指導を工夫することで、イメージ力を高めていくことに繋がることを事後研究では伝えた。

### 《訪問教育学級》

「音・音楽を感じながらお話を楽しもう」という題材で、授業目標は、「①表現や鑑賞の活動をとおして、いろいろな旋律やリズムの楽しさを味わう。②身体表現や歌唱、器楽の活動を楽しむ。③自己決めて表現する活動を楽しむ。」とした。医療優先のベッドサイドでのマンツーマン指導での音楽活動には様々な制限がある。看護師や指導員との連携を図り、生徒の様子を詳細に観察しながら丁寧に指導されていた。医療機器の音が聞こえたり、隣のベッドにも患者がいる環境下において、音や音楽を出すことの難しさを感じた。ハンドドラムやボタン型のベルやウッドブロック、カバサ、ギロ、マラカス、カホン等の小楽器で触覚などの感覚を刺激し、非日常の音を楽しむ活動に取り組んでいた。ICT機器の活用としてiPadで創作された教材を使った物語「そっくりのき」の活動では、その物語につけられている音楽を鑑賞していた。鑑賞曲の選曲において生徒の意思決定を大切にしている指導では、自己決定から自己実現へと生徒の意識を高めるものである。生徒の体力的な問題で生徒の覚醒を促す場面もあり、授業の組み立ての難しさを感じた。多感覚の刺激を必要とする生徒の実態ではあるが、感覚刺激の量をコントロールすることや音源の向きへの課題を検討した。生徒の表現を確認する方法

として呼吸や表情の様子を観察する方法や視聴する集中力を持続させる授業方法など、いろいろな課題を踏まえた取り組みの必要性について協議した。

### (3) 研究の成果

研究の成果として各学部では下記のようにまとめられた。(実施報告書「研究の成果」より抜粋)

#### 1) 小学部

研究を通して、授業づくりで、ねらいや根拠を明確にすること、その上で題材や教材の選定を的確に行うことの大切さを実感した。

また、児童の表情や動き、体調や様子を見て教材の工夫や授業を構成しなければならないことを気づかされた。さらに、授業後の自己評価と相互評価を行うことの大切さを改めて実感した。今後、授業を構成する上で職員同士の共通理解を図り、よりよい授業づくりを進めていきたい。

#### 2) 中学部

授業を組み立てていく上で、生徒が主体的に動き、楽しいと感じる授業の作り方を学ぶことができた。また、授業展開の仕方や教具(楽器等)の提示の仕方等、実践授業をする中での専門的視点からの助言は大きかった。さらに、授業改善をしていく中で、授業の準備や授業展開での直感や創造力、生徒の反応をイメージすることは大切なことであることも分かった。今回の研究の中で外部専門家の助言等を通して授業の改善につながり、生徒が普段より、自発的に手を伸ばしたり、声を発したり、リズムに合わせて体を動かしたりする姿が見られ、多くの変容が見られた。

#### 3) 高等部

生徒の目線での体験や感覚の共有の大切さ、教材(選曲)の大切さ、自分が良いと思った教材、体験したものを自分に落とし込んだ教材の活用(気づき、直観力)、生徒の実態にあっている(想像性)、日頃の観察や発達に関わる根拠を共通理解し、目標を明確にして授業に向かうことの大切さを学ぶことができた。

実践授業では、生徒が生き生きと活動様子があり、その後も音楽を活用して生徒の表現の幅を増やし、自主的にリズムや表現を楽しむ様子が見られた。1人の生徒は、好きな音楽を見つけることができ、生活の中でCDラジカセを自分で準備して音楽をかけるなどの成果が見られた。教材教具の工夫、支援の方法、タイミングや声掛け一つで生徒の興味関心や意欲、集中力につながっていくことが改めて分かった。また、日々、授業をつくる中での学び、多くの人に相互評価をもらえるような場の設定、授業改善に繋がった。

#### 4) 訪問教育

訪問教育学級では、普段はベッドサイドで授業する生徒や体調面から個別での対応をしている生徒が多く、今回、合同での授業を実施することで、生徒自身が「音」でつながる感覚や、他の生徒の出す「音」を聴く貴重な時間となった。また、職員にとっても、自分のクラスの生徒が他の先生からの働きかけにどう反応するのか、新しい音楽や楽器への興味・関心、反応を見ることができた。

講師の専門的な助言や身近なものから作成された手作りの楽器を実践授業の中に取り入れることで、生徒が今までの授業では見られなかった反応が見られたり、コミュニケーション面の幅の広がりを感じたりすることができた。また、楽器の使い方、音の響かせ方にアドバイスを頂けた事で、ベッドサイドで授業する上での立ち位置や、教材の提示の工夫にも幅が広がったように思う。今回の事業

において頂いた「授業を支え、構成し見つめるための視点」教員同士で授業を見合う事がしにくい状況である訪問教育学級での授業改善にも活かしていくことができると考える。

### 3. まとめ

『夢×人×地域「社会とつながる特別支援学校」推進事業』の「外部専門家の活用実践研究」の委託において、「重度肢体不自由児童生徒における音楽療法の在り方」をテーマとして授業実践研究を実施した。筆者による出前授業、担当教員による研究授業（検証授業）、模範授業を16回実施し、それぞれの事後研究を通して課題を明確にした。自立活動での音楽的な活動に焦点を当てた研究であったが、担当教員の授業改善への意識が高く、研究授業ではテーマに沿った高いレベルの授業が実施された。特別支援学校においては、児童一人一人の実態に合わせた教材研究の必要性が高く、授業研究の反省においても課題としてあげられていた。教材研究のためには児童生徒の実態把握やグループの教員の共通理解も不可欠である。指導内容のねらいや評価について明確にしていくことが必要であり、評価基準設定による形成的評価を提案した。今回対象とした重度肢体不自由の児童生徒は、自己評価については支援にあたる教員などの観察者によるものとなるため、指導者及び支援に入る教員の授業評価の在り方の検討についても言及した。自立活動での音楽的活動は、児童生徒にとってはすべての全教育の一部であり、他の領域や教科指導の横断的な指導内容の精選を検討することも必要である。重度肢体不自由児にとって、音楽療法的アプローチを活用することは、個別の指導計画の目標に具体的な指導のアイデアを加えることができ、効果的な指導法として期待させるものである。また、音楽の特性を生かすことで指導のスキルを向上させ授業を改善させるものである。外部専門家が研究に加わることに於いて、授業改善とその課題解決への学校全体での研究の在り方、職員の専門的資質の向上に緊張感をもちながら、意欲的な取り組みとすることができると感じさせられた。

外部専門家として研究に参加するにあたり、日本音楽療法学会認定資格を有する筆者が、音楽療法士の知識技能を生かし音楽療法と音楽療育の関連性をもった授業展開、授業改善へと繋げることができものであった。また、平成29年度まで特別支援学校に長年勤務し、宮崎県教育委員会より委嘱されたスーパーティーチャーとしての特別支援教育の音楽を中心とした教員の指導力向上のための業務に取り組んでいたことで、現場の状況を把握した上で、客観的視点をふまえた授業実践研究に取り組むことができた。教育現場とつながる実践的な研究を今後も取り組んでいきたいと考える。

#### 〈参考文献・資料〉

- ① 遠山文吉(2005)『知的障害のある子どもへの音楽療法』明治図書
- ② 土野研治(2006)『声・身体・コミュニケーション』春秋社
- ③ 松井紀和(1995)『音楽療法の手引き』牧野出版
- ④ 宇佐川浩(2006)『音楽療法における発達診断』日本臨床心理研究所機関誌 Vol. 4
- ⑤ 中島恵子・山下恵子(2002)『音と人をつなぐ コ・ミュージックセラピー』春秋社
- ⑥ 飯野順子・授業作り研究会 I & M(2005)「障害の重い子どもの授業づくり」ジアース教育新社
- ⑦ 編著全国肢体不自由養護学校長会(2005)「新たな肢体不自由教育実践講座」ジアース教育新社
- ⑧ 文部科学省(2019)『特別支援学校学習指導要領解説』『自立活動編』文部科学省